特別寄稿

# 二木謙三 日本感染症学会初代理事長

島田　　馨
元　日本感染症学会理事長

日本感染症学会が1926年（大正15年）に日本伝染病学会とし発足し，その時に初代理事長として就任されたのが二木謙三先生である．（参考資料）

二木謙三先生は明治6年（1873年），秋田佐竹藩の藩医を務めたこともある家庭に生まれた．幼少の頃は病弱で，長生きできないだろうと言われていた．事実，20歳頃まで数多くの病気に悩まされ，徴兵検査に合格することができなかった．その際，検査官から軍隊の麦飯を食べろと言われことを機に麦飯食を始められ，徐々に健康を取り戻された．

明治34年（1901年）東京帝国大学医学部を卒業後，東京市立駒込病院に勤務し，数多くの伝染病患者の治療に当たられた．その一つにペストが挙げられる．これはインドから輸入した綿花の中にペスト菌を持った鼠が紛れ込んでいたことによるもので，患者さんのほとんどは紡績工場の女工さんであった．その後，大正3年（1914年），東京帝国大学助教授に就任し，伝染病研究所（現東京大学医科学研究所）勤務となった．大正10年（1921年）には東京帝国大学教授に就任，昭和8年（1933年）に退官を迎えられた．この間，二木先生は志賀赤痢菌のみと思われていた赤痢菌に駒込Ä菌，駒込B菌の2種を新たに発見，さらには鼠咬症スピロヒータの発見など数多くの業績を挙げられた．昭和30年（1955年）には文化勲章を受章され，93歳で永眠された．

もう一点，二木先生を語る上で忘れてはならないのは健康法である．先生の健康法を紹介すると，玄米を1日1食，茶碗に1膳だけ，1口を10分以上噛むこと，寝る時は板の間に全裸で寝ることを続けられた．日本感染症学会の理事長を務められたことのある美甘義夫先生（元東京大学医科学研究所教授）のお話では，玄米1膳しか食さない二木先生は吐根先生と呼ばれていた，それは吐根を横文字に処方するにはIpecacuanhaeと書くからだと言われた．

二木先生は80歳を過ぎても分厚い原書をリュックに背負い，雨の日も風の日も毎朝1時間の散歩を欠かされなかった．昭和59年（1984年）に私が東京大学医科学研究所感染症研究部に赴任した時は先生の胸像が医局の棚に飾ってあったが，誰が持ち去ったのか，今はないそうである．なお，私の医科研時代のグループから後藤　元君（杏林大学名誉教授）と，岡　慎一君（国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センター長）が二木賞を受賞している．

日本伝染病学会発起人会挨拶

設立者総代　二木　謙三
大正15年6月1日　於：上野精養軒

本日茲に本会発起人会を開催致しましたる所，御多忙の折柄にも係らず斯く多数御来会を辱ふしたことは設立者一同の深く感謝する所で御座います．

今回我々有志が日本伝染病学会を設立致すことに相成りました理由は，御手元に差し上げました趣意書にも概略申し上げました通り急性伝染病に関する学術の進歩を図るという目的でありますが，それは決して既成の学会すなわち細菌学，街生学，実験医学，社会医学，公衆保健などの諸会が主として取扱って居る範囲をさらに屋上屋を重ねて本会でも取り扱うという意味ではない，むしろ既成の学会の何れにも取扱われて居らぬ所の急性伝染病の臨床に直接間接に関係を持つ所の方面を主として取り扱って行きたいと考えて居ります．

抑も本邦は何んといってもまだ伝染病固であって，医学は外国に劣らず進歩しても伝染病の撲滅はまだ出来て居らず，それに支那，露西亜及び南洋を控えて国際病の侵入も繁くあるために，吾々は内地の伝染病と同時に此国際的伝染病や国外の地方病をも取扱って見たいと思って居ります．

伝染病に関する学術の進歩を図ると申すことを大別しますれば，一，伝染病の臨床学，二，疫理学及び予防学，三，臨床細菌学となりますので，その臨床学の方面にはこれに関する原著や総説はもちろん，また実地の診断治療などに直接関係ある症候論，病理，剖検，組織，薬理などに関する必要なる事項は，あるいは講演にあるいは雑誌に復習することもあり，疫理学の方面には本邦独特の泰西諸国と趣を異にせる流行学的の事実もあればその蒐集載録に努め，予防学の方面には純学術的の研究の外にまた本邦各地あるいは南，あるいは北に，あるいは都会に，あるいは部落における風土習慣に適応した特種の予防法もあればそれを攻究しその事実を蒐集し，臨床細菌学の方面には原著の紹介並に実地応用を主として攻究し，その他急性伝染病に関する内外一切の文献を抄録し，また伝染病に関する歴史，史実の散逸し易きものを蒐集し，さらに伝染病の取扱法に関して官民一致の了解を得るが如き仲介をなし，伝染病に関する疑義の問題を広く之を一般関係者の意見に問うて之を紹介し，兼ねて隣接国土における地方病の攻究をし，その他目的に向って必要なる事業をしたいと思うのである．

上述の事柄によりて本会の目的を貫徹し，国家社会に貢献しようとうることは仲々容易の業ではない，偏に各位のご尽力と同志同業の多数の会員諸君の協同一致のご援助に待たなければならない，何卒，無事この会の成立と，成立後の健全なる発達とに向って御助力あられんことを希望し，終りに各位の御健康を祈ります．

（感染症学雑誌　第50回日本感染症学会記念臨時増刊号　総索引集　第1集　p6より抜粋）

令和2年11月20日